

【書き下し文】

香炉峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶東壁に題す

日高く睡り足りて猶ほ起くるに慵し

小閣に衾を重ねて寒を怕れず

遺愛寺の鐘は枕を敬てて聴き

香炉峰の雪は簾を撥げて看る

匡廬は便ち是れ名を逃るるの地

司馬は仍ほ老を送るの官たり

心泰く身寧きは是れ帰する処

故郷何ぞ独り長安のみに在らんや

【口語訳】

香炉峰の麓に新たに山居を占い定め、草ぶきのささやかな家がいまや完成した、思いつくままに東の壁に書きつける。

日がすっかり高く昇り、睡眠も十分とったというのに、それでもまだ起きるのにけだるい。

このささやかな二階の小さな部屋ではあるが、掛け布団を重ねていれば寒さは気にはならない。

遺愛寺の鐘の音は、頭を枕に付けたまま聞き入り、

香炉峰の雪は簾を持ち上げて眺める。

思えばこの廬山は、これこそ俗世間の名声から逃れるのにふさわしい土地であり、

司馬という今の官職は、やはり老後を送るのに都合のいい官職である。

心も体も安らかに暮らせる所こそ、自分の身を落ち着かせる場所、

故郷はどうして長安だけに限ろうか。(いや、どこでも故郷になりうる。)